

訓民正音の文字要素配列法

吉池孝一

1. 序言

訓民正音(ハングル)は単音を表す表音文字要素を左右・上下に綴り合わせて1単位を作りそれを漢字のように縦に書いたわけであるが、このような綴り方が何に範をとったものか問題となる。この点につき、吉池 2010a において、初期ハングルの複子音を表記した表音文字要素の配列法よりみて西藏(チベット)文字に拠ったのであろうとした。その後吉池 2010b では前言を翻し、チベット文字に拠ったとするまでもなく、漢字の文字要素の配列に拠ったとしても説明は可能であるとした。小稿では、表音文字要素を一定の型にしたがって配列・拡張して1音節に収めるという発想についてはチベット文字に拠りつつ、実際の配列は漢字の文字要素構成法に拠ったと見るのが穏当なところであろうとするものである。

さて、河野 1955 は「單位文字はこれらの要素文字の結合による。その結合内における要素文字の配列の順序は左或いは上より右或いは下へ向ふ。大體漢字の構造と同じである。」という¹。たしかに要素が表音であるか表意であるかを問わなければハングルの構造は漢字に類似している。ハングルのこのような表音文字要素の配列という点につき、近年中村 2008 より興味深い漢字依拠説が提出されたので次節においてそのことについて述べ、次いで初期ハングルの文字要素配列の基本的な型とその拡張ということにつき私見を述べる。なおこれ以後ハングルのローマ字転写は河野 1979 の方式による²。

2. 文字要素の蛇行配列

中村 2008 によると、表音文字の多くは直線的(linear)に読み進むという性質を有しているが、そうではない表音文字も少なからず存在するという。そのような文字として契丹小字やハングルをあげる。いま、同論文にみえるハングルの例を紹介する。

「読んだ本」を意味する「읽은 책 (‘irg-‘yn caig)」の要素の配列。

‘irg	‘yn	caig
①②	⑤	⑧⑨
③④	⑥	⑩
	⑦	

この例について中村 2008 に述べるところを引用すると次のようである。

・「全体を現在一般的な左から右への横書きとして見れば、②から③への部分は僅かではあるが逆方向に戻る形になる。これは本来縦書きであったものを横書きにしたために生

¹ 河野 1955 の 366 頁参照。

² 子音字：ㄱ g、ㅋ k、ㄲ gg、ㅇ ng、ㄷ d、ㅌ t、ㄸ dd、ㄴ n、ㄷ r、ㅂ b、ㅍ p、ㅃ bb、
 ㄹ m、ㅈ j、ㅊ c、ㅉ jj、ㅅ s、ㅆ ss、ㅊ z、ㅇ’、ㅎ h、ㅎㅎ hh、ㅇ’。
 母音字：ㅏ a、ㅑ e、ㅓ o、ㅜ u、ㅡ y、ㅣ i、ㅝ e、ㅞ ie、ㅟ io、ㅠ iu。

じた現象であるが、表音文字の配列としては異例と言える。本来の縦書きとして見た場合、各々の要素は蛇行しながら上から下へと進む。その際、行は右から左へ進むにもかかわらず、表音要素の単位では左から右へ進む部分が随所に含まれている。表音文字としては最も若い文字とも言えるハングルにおいて、このような非合理的な配列がいかんにして採用されたかについての詳細は不明である。」(1頁)

・「冒頭に言及したハングルの奇妙な配列も、漢字の影響を考慮すれば納得できよう。かつて西田龍雄氏はハングルの文字配列には契丹小字の影響があると唱えたが、むしろ双方共に漢字の影響を受けたと考えるべきではなかろうか。」(4頁)

以上を要するに、縦書きで、①→②、③←②と下に読み進むという配列すなわち蛇行配列の特徴は、契丹小字やハングルに共通したもので、いずれも漢字の「左→右→下」という偏旁の配列を参考にしたためであるという。中村 2008 は文字要素の構成法を俯瞰し、漢字と契丹小字とハングルに共に文字要素の蛇行配列が見られると指摘したわけである。契丹小字およびハングルの蛇行配列が漢字の影響であるとする説には賛成であるが、初期のハングル資料に散見されるやや風変わりな文字要素の配列について、多少説明が必要となろう。以下この点について述べる。

3. 初期ハングルにみえる文字要素の配列

『訓民正音(解例本)』「合字解」には「合用並書」として興味深い語例がある³。例えば、“隻(ひとつ)”はbjag、“隙”はbsgym、“酉時”はdergs bsdaiとある。訓民正音(ハングル)における文字要素の配列を丸付き数字でしめすと次のようである。なお、aiは一要素分の位置を占めるものとする。



bjag	bsgym	dergs	bsdai
①②③	①②③	①	①②③④
④	④	②	
	⑤	③④⑤	

このような二重、三重に子音文字を綴る仕方については⁴、漢字の構成法のみから説明するのは困難のようにみえる。

思うに、借用漢語音を含め朝鮮語の音節を表記するため、漢字の構造を参照して次のような音節の型が先ず決定されたのであろう⁵。C1は初声(子音)、Vは中声(母音)、C2は終声(子音)。なお、中声である母音にも左から右への拡張がみられる。ㅏ oa, ㅑ ue, ㅓ yi な

³ 『訓民正音(解例本)』は姜信沆 1993 による。

⁴ 文字によって暗示された当時の語音が如何なるものであったかということとは問わない。

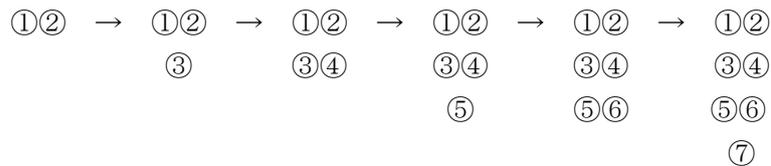
⁵ 『訓民正音(解例本)』「合字解」に「初中終三聲。合而成字。初聲或在中聲之上。或在中聲之左。……。終聲在初中之下。……(初声(文字)は或は中声(文字)の上側に書き、或は中声(文字)の左側に書く。……。終声(文字)は初・中声(文字)の下側に書く。)」とある。訳は姜信沆 1993 による。

どであり、これらについては初声(子音)とともに記される場合、左上C1、左下V1、右V2となることから、IやIIの型におけるC1とVの関係と同様に扱うことにする。

I	II	III	IV
C1V	C1V	C1	C1
C2		V	V
		C2	

ハンゲルの文字要素配列の型

この型には二つの原則がある。一つは縦の拡張は三層までというもので、いま一つは母音の右側に子音を配さないということである。先の「合字解」の複子音を持つ音節の表記でもこの原則は守られている。そして、二重子音や三重子音がある場合は、音節を表記する基本の型に手を付けることなく、そのまま子音を横に拡張する。下に挙げた契丹小字のように、縦長に表音要素を拡張することも不可能ではなかったはずであるが、そのようにしなかったのは、要素を配列する型を変えず、漢字に似せた正方形で一音節を組み立てたためである。



契丹小字の表音要素の拡張⁶

いま音節の型によって「合字解」の例を見るならば次のようなことであろう。bjag はIの型により音節初頭の子音を横に拡張し、bsgym はIIIにより音節初頭の子音を横に拡張し、dergs もIIIにより音節末の子音を横に拡張し、bsdai はIIにより音節初頭の子音を横に拡張した。ハンゲルは縦に書かれるから、横に拡張された音節は見栄えのよいものではない。そこで横に拡張した部分の文字要素を小字としてバランスをとったのである。bjag、bsgym、dergsのgを見ると次第に文字のサイズは小さくなっていく。またdergsのdに比べてbsdaiのdは小さく縦長となっている。このように文字要素の大小、長短を自在に変えて正方形を担保しようとしたところも漢字の影響である。たとえば漢字の棟、林、森、栞などをみると文字要素の木のサイズを自在に変えて正方形を担保している。表音文字に見られる表音文字要素の自在の伸縮は、漢字の影響とはいえ、文字の種類という点からみるならば興味深い現象といえよう。

もっとも、表音文字要素を一定の型に従って配列し拡張する方式につき、そのアイデアを漢字のみから得たとするには無理があるように思える。次節ではこのことについて述べる。

⁶ 契丹小字におけるこのような単位は、語を明示するためのものである。なお、ここに挙げた配列とは異なるものも少数ながらある。たとえば、① ① ① ① など。

② ②③ ②③ ②③
④ ④⑤

以上、清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985 の 147 頁参照。

4. チベット文字の文字要素配列法

東アジアの文字を見渡してみると、「合字解」の語例と類似した縦横への音節要素の拡張はチベット文字に見られる。いま寺本 1922 により 1 音節を構成する最も複雑な綴り字の例を右端に示し、それ以外を諸書により例をとると次のようになる。なお数字は、ローマ字綴りの左端から順に振ったものであり、その数字の配置でチベット文字の文字要素の配置を示したつもりである。したがって、bsgribs の場合、b を①として順に番号を振り、右端の s が⑦となる。[3]のように□印を付したものは核となる子音であり、この例では g がそれにあたる。

[g]i(～の)	[g]ri(剣)	[k]hrom(市場)	[k]hris(傍ら)	bs[g]ribs(障り)
				⑤
②	③	③	④	②
[1]	[1]	[1]④	①[2]⑤	①[3]⑥⑦
	②	②	③	④

上に示した音節は網羅的なものではないけれども、[1]・[2]・[3]のような核となる子音を中心として一定の型に従って縦横に音節要素が拡張されることは示し得たであろう。この拡張のされかたはハングルとは異なるけれども、表音要素を一定の型に従って拡張し一音節にまとめるという原理は共通している。このような原理については、ハングルはチベット文字にヒントを得たとみたい。すなわち、ハングルは、漢字漢文の影響を受けつつ、チベット文字をも参照したのではないかということである⁷。

5. 結語

以上を要するに、訓民正音(ハングル)の表音文字要素の配列において、まず漢字の文字要素配列の仕方を参考にしてⅠⅡⅢⅣという音節の基本的な型が作られた。次いでその型を変えずに二重子音や三重子音を表記するとなると、子音文字の部分そのまま横に拡張せざるをえず⁸、その結果として、「合字解」の「合用並書」に見られるような、漢字の構造とは似ても似つかない文字要素の配列となって現れたというわけである。その際に表音文字要素の大小長短を自在に伸縮させて漢字に似せた正方形を担保したのである。

もっとも、表音文字要素を一定の型にしたがって拡張し 1 音節内に収めるという発想は漢字ではなく西藏(チベット)文字に拠ったと見たほうが無理はない。しかしながら実際に表音文字要素を配列する段においては漢字の文字要素構成法に拠ったのである。

〈参考文献(発行年順)〉

⁷ 吉池 2010a において「西藏(チベット)文字の影響を考えてもよいのではないかと述べたことがある。その主旨は「チベット文字の 1 音節内の文字要素は左から右へ横書きされ同時に縦方向にも要素を重ねるわけであるが、これに範をとってハングルの文字要素を配して 1 音節に纏め、それを縦に配列していくなれば、蛇行配列とならざるを得ないであろう。そうであるならば、ハングルの蛇行配列は、チベット文字に範をとったために生じたと言えなくもない。もしもチベット文字に範をとったならば、「合字解」にみえるようなやや風変わりな要素配列の語が出てきてもおかしくはないであろう。」というものであった。

⁸ 『訓民正音(解例本)』「合字解」に「其合用並書。自左而右。初中終聲皆同。」(その合用並書は左の方から右の方に書き、初声・中声・終声もすべて同じである)とある。訳は姜信沆 1993 による。

- 寺本婉雅 1922. 『西藏語文法』 内外出版株式會社。
- 河野六郎 1955. 「朝鮮語」, 『世界言語概説 下巻』 研究社辭書部, 357-439 頁。
- 河野六郎 1979. 「朝鮮語ノ羅馬字轉寫案」, 『河野六郎著作集 第1巻』 平凡社, 96-97 頁。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』 北京: 中国社会科学出版社。
- 星実千代 1991. 『エクスプレス チベット語』 白水社。
- 姜信沆 1993. 『ハングルの成立と歴史』 大修館書店。
- 中村雅之 2008. 「表音文字の配列」, 『KOTONOHA』 第 72 号, 1-4 頁。
- 吉池孝一 2009. 「東アジアの漢字関連文字」, 『現代中国への道案内Ⅱ』 白帝社, 85-110 頁。
- 吉池孝一 2010a. 「漢字関連文字を知る」, サイト古代文字資料館「文字と言葉を知る」中の 2010. 2. 16 付け記述。 <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/>
- 吉池孝一 2010b. 「訓民正音の文字要素の配列と伸縮」, 『KOTONOHA』 第 97 号, 22-25 頁。